



| | |
|--------------|---|
| Title | 谷崎潤一郎『少将滋幹の母』論：〈母恋い〉の語りに秘められたもの |
| Author(s) | 張, 麗静 |
| Citation | 阪大近代文学研究. 2013, 11, p. 66-81 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/68324 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

谷崎潤一郎『少将滋幹の母』論

— 〈母恋い〉の語り秘められたもの —

張麗静

はじめに

『少将滋幹の母』（東京・大阪『毎日新聞』、昭和二十四（一九四九）年十一月十六日〜翌年（一九五〇年）二月九日）は、谷崎の創作円熟期と言われる関西移住後の昭和期に書かれており、先行研究において谷崎の〈母性思慕〉作品の頂点と位置付けられる作品である。

従来の研究においては、妻を失った国経の煩悶と執着心、母と生き別れた滋幹の〈母恋い〉、これら二つの主題を軸にして本作を解釈するのが主流であった。〈母恋い〉については、殆どの先行研究で、〈その八〉から登場する架空の書物「適古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記」⁽¹⁾にあらわれる、母への滋幹の思慕の念が注目され、それが幼い頃に生き別れた母と滋幹との再会の場面に関連付けられて読まれてきた。例えば、滋幹と母とが再会するラストシーンは、「精神的であるというにはあまりにも官能的であり、そのかぎりでは一種

独特の性的再結合である」⁽²⁾、「滋幹にとつては、ある戦慄にみちた強烈な幼児体験のアイロニカルな再現でもある」⁽³⁾、「国経の不浄観の裏返し幻想である」⁽⁴⁾、「滋幹（あるいは作者）の願望が描いた「非現実の世界である」」⁽⁵⁾、「永遠女性」の出現の場」⁽⁶⁾である等と多様ではあるが、滋幹の思慕との密接な関わりによつて捉えられている。中でも、「この滋幹と母の再会の場面こそ、現世では決して到達することができない、戦後の荒廃しきった日本の風土のなかで紡ぎだされた、『筆者』のアイデアの中でのみ齎された、浄化された夢の光景」⁽⁷⁾と、この場面に「浄化」を読み取る石割透氏の論考は、本作の〈母恋い〉が「筆者」と関連しているという点で重要な指摘である。だが、いずれの先行研究においても、「筆者」が滋幹の〈母恋い〉を語る際、「筆者」の位置については論じられていない。たとえば、滋幹は「徹頭徹尾、恋しい人に捨てられた」父の国経と同様に、母に捨てられた「世にも気の毒な子供」だと指摘されてきた。また一

方で、「父同様滋幹にとつても、母は「神秘」であり「謎」であつた」⁸⁾と述べられている。それでは、「筆者」は本作の〈母恋い〉をどのように描こうとしているのか、そのことについて、やや迂遠とも思われるが、本作中の平中に関する箇所注目することから考察をはじめてみたい。

全十一章からなる本作において、平中に関する物語は〈その一〉、〈その二〉、〈その六〉、〈その七〉の四章に見えており、これは全体の三分の一以上を占める。「この物語はあの名高い色好みの平中のことから始まる」〈その一〉と語り始められ、「そうこうするうち、その年の夏も、秋も暮れて、平中の家の籬に咲いた菊の花も色香がうつろう季節になつた」

〈その二〉、「妻を奪はれた国経が、恋慕と絶望に苛まれつつその後なお三年半の歳月を生きた間のことは、後段滋幹のくだりに於いてやや詳細に触れる折があらう。今は暫く筆を転じて、あのよるあの車の中へ「物をこそ」の歌を投げ入れた平中の方へ叙述を移さう」〈その六〉、「筆者は前に、平中の歿年は延長元年とも六年とも云はれてゐて、確かでないと思ふことを記した」〈その七〉、などの表現で平中の物語は繋がり、展開していく。その一方、滋幹と国経の後日談は〈その八〉から〈その十一〉までの四章を占め、全体の三分の一を超えぬ。「筆者」は〈その八〉の冒頭に「平中、時平、及びその子孫たちの後日譚はあらまし以上の如くであるが、あの可哀さうな老大納言と、彼が夫人在原氏の腹に儲けた子の滋

幹は、その後どうなつたことであらうか」という一節で、平中、時平の物語を締めくくりながら、話題を国経と滋幹の父子に移行する。以上の構成は、個々の物語間の繋がりに配慮しながら、物語全体を繋ぎ合わせようとする「筆者」の姿勢を窺わせるものである。

「筆者」あるいは「作者」が注釈や解説を行う形式の谷崎作品は、『少将滋幹の母』の他に、『卍』『改造』昭和三年三月、昭和五年一月）や『春琴抄』『中央公論』昭和八年六月）などが挙げられる。こうした作品群は、すべて谷崎が関西に移住した後の昭和期に創作されたものである点に注目したい。この時期はいわば谷崎文学の古典回帰期であり、いわゆる「永遠女性」⁹⁾像が形成されていく時期でもある。この時期の谷崎作品に見られる語りの多様性と語りの熟達に関しては、数多くの論考¹⁰⁾がある。本作の語りの方方法に関しては、浅上泰子氏は「一般的に物語における語り手は、常に第三者的立場から自由な発言性と、あらゆる視点から読者に物語を納得させるといふ機能を持っている。『少将滋幹の母』が、小説らしからぬ小説であるのは、語りの文体という手法のためである」と述べ、「筆者」というのは作者が作中に解説を挿入する際の一つの仮面であり、読者の属する現実世界と、語られる物語世界の橋渡しの役割を担っている」¹¹⁾との見方を提示している。また、大木絢子氏は語り手について、「作者は、『語り手』として、必要とあれば何らはばかるこ

となく自らの「解説」や「感想」を作品に挿入できるという特権を持つのであり、「描写」の描ききれなかつた部分（作者の資質が及ばなかつた部分）を「解説」で補つてゆくという操作も可能になる（①）との認識を示している。こうした従来論考においては、「筆者」が作者の「一つの仮面」であること、作者が語り手であることを前提にして語りの方が論じられている。

「筆者」が自らの存在を明示しながら、「筆者」を名乗つて語る場面に着目するならば、先行論の「筆者」が作者の「一つの仮面」であるという指摘に首肯できる。たとえば、次の引用のように、

ついでながら、筆者はその時分のお虎子がどんなものであつたかを知らない。今昔にはたゞ「筧」と云つてあるが、宇治拾遺には「かはご」とあるので、皮で造つた筧が普通だつたのであらうか。（その六）

ここでは、「筆者」が二つの典拠の記述を挙げ、その時分（平安朝初期）の「筧」が皮で造られたものだと推測している。しかし、物事の認識に対して「筆者」が曖昧になる場合には、

筆者も佛教の教理には暗いので、誤りを冒すことなく傳へ得るかどうか覚束ない。筆者は此のことで、日頃眷顧を蒙つてゐる天台宗の某碩学などにも尋ね、参考書なども貸して戴いたのであるが、調べ出すといよく深奥で

分りにくくなるばかりである。尤もこゝではそんなに深く説き及ぶ迄もないのであるから、たゞ順序として、物語の進行に必要な面にだけ触れて置かう。（その十）

とあるように、自分の認識を明らかにすることに慎重な「筆者」の姿勢が読み取れる。なお、（その八）以降末尾まで、滋幹と母との関係は父国経の妻への恋慕と共に語られていく。その際、「筆者」は滋幹のことを「自分」という言葉であらわし、滋幹の心理状態を読み手である「読者」に示しながら、最後に滋幹と母との間に距離を置いた原因は、滋幹が母に見限られた「僻み」を持つためであると考えられる。

自分は年が行けば行くほど、母と自分との距離が遠くなるのを感じた。たとひ夫の左大臣は亡くなられても、矢張母は自分などの手の届かない雲の上の人、高貴の家の後室として多くの人に冊かれつゝ、立派な居館の玉垂の奥に朝夕を過してゐるものと想像された。（中略）蓋し、それだけでなく、自分は父の大納言と共に母に見限られたのであると思つてゐた滋幹は、母に対して一種の僻みを抱いてゐたらしいので、そんなことが一層母との間を心理的に遠ざける因となつたのでもあらう。（その十一）

つまり、「筆者」は物語を展開するにあたつて、史実をかき集めながら、自らの考えを言い表す。また、登場人物の心理を明示しながら、右の傍線部のように、その人物の心理を

概括する。これらの箇所では、「筆者」の「昭和の現代」（本作の発表する年・昭和の二十四年を基準にする）の価値判断があらわされている。そこで本論では、まず、作者（谷崎）と「筆者」とは一旦は切り離して、作品内の「筆者」の位置に注目し、「筆者」と滋幹の〈母恋い〉との関わりを明確にしたい。その上で、「筆者」によって捉えられる、北の方の「躊躇」する姿の意味合いを分析し、それを『主婦之友』（一九一七年創刊）昭和二十二年八月号における姦通罪の廃除についての取材や、一九五〇年代の『毎日新聞』の経営方針と照合して考察する。この作業により、本作における〈母恋い〉の様相と一九五〇年代の時代風潮との関わり合いを明確にすることが本論の目的である。

なお、従来の研究では詳しく論じられてこなかったが、古典作品からの「山吹」と「香の匂」の撰取を辿ってみたい。滋幹と母とが再会するラストシーンに登場した「山吹」と、北の方特有の「香の匂」が如何なる機能を果たしているのかについては、〈母恋い〉のテーマとの関わりにおいても重要な意味を持つ。そこで本論では、これらも併せて取り上げ、本作における〈母恋い〉の語りに秘められたものを明らかにしたいと思う。

一、「筆者」と本作の〈母恋い〉との関わり

周知の通り、谷崎は、大正六（一九一七）年五月十四日に、

実母・関を亡くした後、母子思慕作品^①を發表し続けている。その中でも、『少将滋幹の母』の「筆者」と『吉野葛』^②（『中央公論』一九三二年一月〜二月）の語り手・「私」とが、男主人公の母への思慕の念を伝えるものとして設定されているという点で注目される。このような語りの手法は谷崎の〈母恋い〉をテーマにする作品群において、この二作のみに見える。一人称の「私」と三人称の「筆者」は男主人公の〈母恋い〉をどのように語っていくのかを見てみよう。

『吉野葛』では、後南朝の歴史小説を書こうとする「私」が、旧友津村に誘われ、秋の吉野を訪れる。小さい頃に母と死別した津村は、母を強く慕っており、母の跡を遡及するため母の故郷である吉野の国栖を訪れ、そこで母の遠戚の少女お和佐と出会う。津村は彼女に亡き母を重ね、ついに彼女と結婚する。

『吉野葛』において、津村の聞き手としての「私」は、次の引用①②のように、津村の身の上を読み手に「簡略に」「伝える」、あるいは「間接に」「取り次ぐ」ことを表明している。

①さてその岩の上で、津村が突然語り出した初音の鼓と彼自身に纏わる因縁、——それから又、彼が今度の旅行を思い立つに至った動機、彼の胸に秘めていた目的、——そのいきさつは相当長いものになるが、以下成るべくは簡略に、彼の言葉の意味を伝えることにしよう。

〈その四 狐噲〉

②さてこれからは私が間接に津村の話を取り次ぐとしよう。

〈その五 国栖〉

しかし、ここで注目しておきたいのは、津村によって語られる母への思いに合わせて、「私」が自らの観点を示すという点である。それは次に挙げる③④の本文を見ても分かる。

③そんな点から考へると、自分の母を恋ふる気持は唯漠然たる「未知の女性」に対する憧憬、——つまり少年期の恋愛の萌芽と関係がありはしないか。なぜなら自分の場合には、過去に母であつた人も、将来妻となるべき人も等しく「未知の女性」であつて、それが眼に見えぬ因縁の糸で自分に繋がつてゐることは、どちらも同じなのである。蓋しかう云ふ心理は、自分のやうな境遇でなくとも、誰にも幾分か潜んでゐるだらう。〈その四 狐噲〉

④有りていに云ふと、彼の青春期は母への思慕で過ぐされたといつてよい。行きずりに遇ふ町の女、令嬢、芸者、

女優、——などに、淡い好奇心を感じたこともないではないが、いつでも彼の眼に止まる相手は、写真で見る母の佛に何処か共通な感じのある顔の主であつた。彼が学校生活を捨て、大阪へ歸つたのも、あながち祖母の意に従つたばかりでなく、彼自身があこがれの土地へ、——母の故郷に少しでも近い所、そして彼女がその短かい生涯の半分を送つた島の内の家へ、——惹き寄せられた為

なのである。

〈その五 国栖〉

引用③では、津村の「母を恋ふる気持」と「未知の女性」に対する憧憬との関係について、「私」が津村のことを「自分」という言葉であらわし、津村の心中を直接読み手に伝える。その一方、引用④では、傍線部の言葉にうかがえるように、「母への思慕」を持つ津村を引き付ける女性には「母の佛」があると、津村の心理を知っている聞き手の立場で「私」は間接的に語る。つまり、『吉野葛』の「私」は津村の聞き手であり、作中の登場人物でもある。そのような「私」は津村の心中を間接的にあらわす一方で、津村に関する情報について、自らの立場を使い分けながらも、一貫して津村の〈母恋い〉の気持をあらわすことが確認できる。これと較べてみると、『少将滋幹の母』の「筆者」は「昭和の現代」人で、平安時代の物語を展開するために、第三者の立場を示しながら、自らの見解を示す側面を持つことが特徴である。

いつたい誰の場合でも、母の顔を全く知らないのなら格別、頑是ない時分におぼろげながら母を見た記憶があり、而も間もなくその母が余所の男の所へ走つてしまつたと云ふやうなことに遭ふと、その子の母を思慕する情は尋常一様でないのであるが、況やその母が世にも稀なる美女であつた場合、又況や、やう／＼物心のついた年頃に、今は他人の妻になつてゐる母の許を訪れたり、その

母の手で腕へ歌を書かれたりした、異常な思ひ出を持つ場合に於いてをや、そして又況や、その母が現に存命中であることが分つてゐる場合に於いてをや、である。

（その八）

ここでは、「筆者」は一般的な子供の心理を想定しつつ、幼い頃に母と生き別れた滋幹の「母を思慕する情」が「尋常一様でない」と推断した後、「その母が余所の男の所へ走つてしまつた」と表現する点には、息子の立場から母の責任を放棄する北の方の行為が示されており意味深い。

以上を纏めてみよう。『吉野葛』では、一人称の語り手である「私」が津村の聞き手と語り手という二役を通じて、津村の「母への思慕」と「未知の女性」に対する憧憬との繋がりを繰り返して語ることによつて、「母恋い」の主題性が収斂される。それに対して、『少将滋幹の母』では、三人称の語り手である「筆者」が、滋幹の心理を直接読者に伝える時、第三者の立場から、性愛を優先し母親の責任を放棄する北の方の行為と、子の「母恋い」の感情との関連性を言い表す。

つまり、『少将滋幹の母』では、母像は「滋幹の日記」における滋幹の視点に留まらず、第三者の立場になる「筆者」の視点によつて捉えられる。このように、『少将滋幹の母』の「母恋い」の語りにも性と性愛という問題が内包されることで、その主題性が多岐になる。次節では、「筆者」が、母としての北の存在をどのように捉えているのかについて、

さらなる検討を行いたい。

二、母性と性愛という問題

——「躊躇」する女の姿に着目して

（その十一）では、「筆者」が、「父よりも母を偏愛した滋幹は、たとひ母のことについて悪い風聞があつたとしても、そんなことを記す訳はない」と記されており、母に対する滋幹の「思慕」の念は、母親の「風聞」に左右されないことを「読者」に示している。その一方で、「筆者」は、「彼女は時平に先立たれた時が二十五六歳だつたであらうが、それから若く美しい未亡人として静かな生涯を生きたのであつたか、或は又も第三第四の男を作つたのであつたか。嘗て老大納言の妻として、平中と云ふ情人を持つてゐた女性であつて見れば、少なくとも人目を忍んで誰かと甘いさゝやきを交すぐらゐなことがあつても不思議はないが、さう云ふことも今はすべて知られてゐない」と記し、平中との「不義」を根拠として、北の方が恋を優先する生き方を選ぶ可能性が高いことに言及している。

「筆者」が北の方の性愛を求める行為を推測することについて、明里千章氏は「実物を直視せず、母像を浄化していく」「滋幹の意識的な所為」⁽¹⁴⁾を強調する役割を持つと述べている。本作の語りが、母親の「風聞」に左右されない滋幹の気持を一貫して述べていることからすれば、その指摘に異

議はない。だが、拙稿(5)で取り上げた、彼女の素直で情に脆い性格(いわゆる老いた夫国経に対する同情心や、過去の恋人平中の歌に対する感動と懐かしさや、また左大臣時平への恋心)とを結び付けてみると、「筆者」の推測は、母性と性愛との間に彷徨する北の方のイメージを作り上げる機能があり、そのような北の方像を「読者」に示す働きがあるとも考えられる。時平に連れ去られる際の、彼女の「躊躇」する姿にも、そうした北の方像が顕著に見て取れる。次の引用では、「筆者」は第三者の立場で、心惹かれた時平に北の方が、能動的について行く振る舞いを捉えている。従来、この能動的な行為は彼女の〈淫婦〉性と〈悪女〉性に結び付けられているが、しかしここで、傍線部に示されたこの一連の能動的行動を取る前に、一重傍線部にうかがえるように、彼女が「躊躇するらしく」振る舞うことに注目すると、そうした解釈のみでは不十分ではないかと思われる。

・ 彼はいきなりその人の腕を取つて肩にかけた。女は引き立てられながらさすがに躊躇するらしく見えたが、でもしなやかに少し抵抗しただけで、やがてする／＼と体を起して行くのであった。
(その四)

・ その人は右の腕を左大臣の右の肩にかけ、面を深く左大臣の背に打つ俯せて、死んだやうにぐつたりとなりながら、それでもどうやら自分の力で歩みを運んでゐるのであつたが、さつき御簾からこぼれて見えたきらびやかな

袂や裾が、丈なす髪とよれれ合ひもつれ合ひつゝ、床を引きずつて行く間、左大臣の装束とその人の五衣とが一つの大きなかたまりになつて、さや／＼と鳴りわたりながら階隠の方へうねつて行くのに、人々はさつと道を開いた。
(その四)

先述のように、夫にしろ、愛人にしろ、左大臣にしろ、彼女に情に脆い一面が見える点を考え合わせると、彼女の「躊躇」は、母としての息子への配慮による反応であると言える。このように、『少将滋幹の母』は、滋幹によつて美化された〈母〉への思慕の念を「筆者」が一貫して強調する一方で、その〈母恋い〉の語りに母性と性愛の問題を仕掛けられている作品であると考えられる。母性と性愛との間で彷徨する北の方の姿には、母性より性愛を優先する母に対して冷やかな視線ではなく、むしろ客観的な立場を取る「筆者」の態度が見えており、この点は注目に値する。

『少将滋幹の母』の、母性より性愛を優先する母の在り方は、後年に発表された谷崎の回想記『幼少時代』(『文芸春秋』一九五五年四月〜一九五六年三月)における母・関の存在を想起させる。

谷崎の『幼少時代』は、幼年期に関する記憶によつて回想される一人称小説である。『幼少時代』における「父と母と」の記述によれば、幼い頃の「私」は母、関より乳母に親しみを持ち、母より乳母と一緒にいる時間が長く言葉の交流

も多いことがうかがえる。父と母が休養地の大磯に行く時、「私は乳母に預けられて置いてき堀にされ、一緒に連れて行かれたことは一度もなかった」とあり、そのことに對して「私もそんなに駄々を捏ねたり後を慕ったりはしなかった」という叙述がある。母の不在に對して平氣である「私」と母との間には、母子の結びつきが欠如していること、母が子供の世話よりも父との享樂を優先することがあらわされている。それに対して、「私」は母に不満というよりも冷靜な態度を示す。

父と母との三十年に余る夫婦生活のうちで、二人が最も幸福だったのは此の前後の数年間であつたらしいが、分けてもお磯では随分楽しい月日を送つたのだと見えて、後に幾度となくその時分の話を聞いたことがあつた。

〈父と母と〉

この二作において、第三者の立場である「筆者」も、一人称の語りである「私」も、母性より性愛を選んだ母、そして子供より夫婦の享樂を優先する母に對して、冷ややかな視線ではなく、母であると同時に、女でもあり続けることを「読者」に意識させている点には注意すべきである。『幼少時代』は『母を恋ふる記』、『吉野葛』、『夢の浮橋』（『中央公論』、昭和三十四（一九五九）年十月）と同じく、幼い頃から母と死別しあるいは生き別れる息子の実母に對する思慕を題材にしたものである。しかし、母性と性愛の二者択一を迫

られた北の方の「躊躇」する姿を「読者」に示していることは、ほかの作品に見られない本作の特徴として注目される。

『少将滋幹の母』や『幼少時代』が発表された昭和二十年代は、戦後、姦通罪が排除されて間もない時期⁽¹⁶⁾である。だからといって、姦通を犯す妻が世間に容認された訳ではない。女性解放と女権の拡張を目指す、戦前の四大婦人雑誌の一つである『主婦之友』（一九一七年創刊）の昭和二十二年八月号に東大法学部長・法学博士・刑法改正委員の我妻栄による『貞操問答』——新しい刑法はなぜ不貞を罰しないか——⁽¹⁷⁾について行われたインタビューが掲載されている。その中で、取材者は以下のように発言している。

でもそれは変じやないかしら。結婚している人たちがそんな不義なことをしたら、男だつて女だつて罰せられるのが当然なことですよ。それを罰しないで放任しておくなんて、何だか姦通を悪いことゝ認めないみたいですね。法律が不貞を許容していいのでしょうか。

また、『少将滋幹の母』を掲載する『毎日新聞』は、昭和二十四年十月一日に「新聞に何を望むか」をテーマに、大阪毎日新聞社による世論調査を行った結果について、風呂本薫氏⁽¹⁸⁾は「自由化を受けた新聞が、自主的に読者の要求を選択して記事面に反映させようと模索した」もので、小説欄でも、「特定の読者向きとなつても、何らかの関心を引き付けないでは措かない、あるテーマを持った中堅の作家が起用さ

れた傾向にある」と述べる。さらに、昭和二十年九月一四日から昭和二十六年八月九日までの『毎日新聞』小説欄に掲載された小説を挙げ、小説欄の傾向は「通俗的な現象を来した」と裏付ける。

その一方、同時期に姦通小説が書き始められる。中産階級の貞淑な妻の姦通を中心に扱いたベストセラーとなった大岡昇平『武蔵野夫人』（『群像』、一九五〇年）と、三島由紀夫『美徳のよるめき』（『群像』、一九五七年）がその代表例である。これら二作より早く『毎日新聞』に発表された『少将滋幹の母』に登場する、子を持ちながら「不義」（姦通）を犯す既婚女性の生き方は、昭和二十年代の現実の社会における姦通問題に繋がっている。当時の読者の関心を寄せることができただろう。そういう点で、『少将滋幹の母』は、後に盛んになった姦通小説にとつて、その先駆性と画期的な意味を持つ存在と言えよう。

『少将滋幹の母』では、北の方が自分の恋を優先するとき、それが息子の人生にどのような影響を与えるかは語られない。ただ、そこには、女・母を両立できない母の「躊躇」する姿が示されており、これが〈母恋い〉の言説を複雑化する結果へと繋がっている。つまり、〈母恋い〉をテーマとする作品に、母性と性愛という問題を絡めている点が谷崎のほかの〈母性思慕〉作品に見られない『少将滋幹の母』の独自性であったと言えるのである。

三、「山吹」と「香の匂」の表象

『少将滋幹の母』の最終部、滋幹と母との再会の場面では、谷崎の作品によく見られる月や桜、水以外に、「山吹」と「香の匂」が登場している。『少将滋幹の母』における月に關しては、「滋幹の父国経にとつてはものみなを死骸と化する「不浄観」へと導く光として、一方滋幹にとつては、「花を透かして月あかりに暈されて」幼き日に別れたそのままの母と邂逅する甦りの光として投げかけられる」¹⁹との指摘がある。桜についても、「谷崎の描く桜の爛漫たるさまは、基本的なところに歌舞伎の舞台の桜があり、（中略）、彼の桜の原点が舞台のそれであっても不思議はない。だから、桜のもとには、必ず美しい人が立ち、そこから物語が始まるはずなのである」²⁰、「平中や国経、時平を感わした北の方が、尼僧姿で「桜の幹に寄り添うて」む、別れた時そのままの美しい母として顕現する」²¹との見方がなされている。このように様々な意見が示される「月」や「桜」とは異なり、「山吹」に關しては、小林正明氏の「謡曲『大原御幸』の詞章で建礼門院の花とされる「山吹」の枝を谷崎は聖母に配している」²²という指摘があるのみである。「山吹」は『万葉集』『古今集』『大和物語』など、日本文学において古くから作品に取り入れられている花の一つである。『源氏物語』に深い関わりのある谷崎が、光源氏が「山吹」を見て紫上へ

の恋しい思いを引き起こされる場面を、自らの作品『蓼喰ふ虫』及び本作に取り込んでいること、また和歌中における「山吹」とその香りが懐かしい感情を強めるものとして用いられる手法を本作の最終部に援用している可能性があることを、本節では指摘したい。以上の点を踏まえて、以下、「山吹」と「香の匂」に関する撰取の問題を検討する。

〈その十一〉において、「夕桜」と「月」、「山吹」が同時に登場する際、三者の描写には明らかに違いが見受けられる。

「夕桜」は「美しい妙齡の女」の現出と「何か魔物めいた妖麗さ」を想像させるものとして描かれ、「月」は「夕桜」の幻視効果を増すものとして用意されることが一見して分かる。

恰もそれは、路より少し高い所に生えてゐるので、その一本だけが、ひとり離れて聳えつゝ傘のやうに枝をひろげ、その立つてゐる夜路などを行く時、たま／＼美しい妙齡の女の一人歩きをしてゐるのに出遇ふと、男の人に遭つたよりも却つて無気味な恐怖に襲はれる。それと同じに、かう云ふ無人の境にあつて静かに咲き満ちてゐる此の夕桜には、何か魔物めいた妖麗さが附き纏つてゐるやうに思へて、彼は我が眼を疑ひながら、左右なく近寄らうともせず、遠くから眺め渡してゐた。桜のある崖は、それが殆どひとかたまりの大きな岩蒸したもので、川のおもてから一丈程抽んでゐるのであるが、ひとすぢの細い／＼清水が、何処からか出て来て、その崖の下

をめぐつて、下の溪川へ流れ落ちてゐ、崖の中途から一と叢の山吹の花が、清水の方へしなだれかゝつてゐるのである。でも、さう云へばさつきから余程の時が過ぎてゐるのに、滋幹のイন্দである所から、向うのこま／＼とした景色がこんなに鮮かに見えるのは、——花が雪あかりのやうな作用をして、あたりの物象を暗まざれから浮き上らせてゐるのであらうか、——と、ちよつと滋幹はそんな気がしたが、それは花のあかりではなくて、花の上の空にかゝつた月が、今しも光を増して来たのであつた。土の上はしつとりと湿つてゐて、空気の肌ざはりはつめたいのだけれども、空は弥生のものでらしくうつすらと曇つて、朧々と霞んだ月が花の雲を透して照つてゐるので、その夕桜のほの匂ふ谷あひの一郭が、幻じみた光線の中にあるのであつた。

そして、「崖の中途から一と叢の山吹の花が、清水の方へしなだれかゝつてゐる」という一節の「山吹」は重要な意味を持つと考えられる。北の方が、「しづかに花の下を去つて、その崖を下り始めた。そして清水のほとりに来て身をかがめながら、手をさしのべて山吹の枝を折らうとする」・「手折つた山吹を持つて立ち上り、又崖の方へ引き返さうとする」という箇所と、滋幹が「夢中で母の手にある山吹の枝を拂ひ除けながら、もつと／＼自分の顔を母の顔に近寄つた」箇所とを合わせてみると、「山吹」が重要な存在として理解できる

からである。

〈その八〉では、「筆者」が『大和物語』における滋幹の記事を引き合いに、滋幹の人柄を紹介する場面がある。『大和物語』百段「岸の山吹」には、大井に住んでいる季繩の少将が、山吹の花が咲く時分に見に行くとの約束を忘れていた帝（醍醐天皇Ⅱ執筆者注）に、「散りぬればくやしきものを大井川岸の山吹今日さかりなり」²³ という歌を贈ったとある。また、百十三段「井手の山吹」では、兵衛の尉が女と疎遠になつてのち、臨時の祭りの舞人に指名されて賀茂神社に行く。女は彼の姿を見ると、「むかし着てなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそに見しかな」²⁴ と詠んで送った。それに対して、兵衛の尉は山吹に付けて、「もろともに井手の里こそ恋しけれひとりをり憂き山吹の花」²⁵ という歌を返したとある。「筆者」は『大和物語』における滋幹の記事を引用するとき、『大和物語』に登場する、春の季節を表象する「岸の山吹」や、恋心の表象としての「山吹」を意識してはいはずである。

加えて、谷崎潤一郎『新々訳源氏物語』²⁶ では、山吹は山桜とともに服の色を形容したり、亡くなった妻の追慕の念を引き起こすものとして使用されたりしている箇所がある。例えば、源氏が庭に咲き乱れている「山吹」を見て、亡くなった妻紫の上を懐かしんで悲しんでいる場面は、『新々訳源氏物語』では次のように現代語訳されている。

・春が深くなり行くままに、庭のけしきは昔に変わらないがら、別段花を惜しみ給うというのではなしに、心が落ち着かず、何事につけても胸痛くお感じになりますので、すべてが別世界のような、鳥の音なども聞えない山の奥が、いよいよ恋しくおなりになります。山吹などが快げに咲き乱れていますのを見給うても、すぐもう涙が誘われるようにおなりになります。
411

・閨伽の花が夕日に映えてたいそう美しく見えますので、「春に心を寄せていた人が亡くなって、花の色が殺風景のようにばかり思えましたが、佛のお前に供えて見ると綺麗ですね」と仰せになつて、「対の前の山吹は、やはりめつたに見られない花の様子をしていますね。房の大きさなどが見事ではありませんか。上品ということとは考えていない花でしょうが、派手で、賑やかという点では、なかなか風情に富んでいます。『植ふし人なき』春とも知らず顔に、例年よりもひとしお色香を増していますのは哀れでございます」と仰せられます。
413 ～ 414

『新々訳源氏物語』において妻への追慕の念を引き起こさせる「山吹」は、昭和三年（『大阪毎日新聞』一九二八年一月四日～一九二九年六月一日）に発表された谷崎の『蓼喰ふ虫』にも取り込まれている。『蓼喰ふ虫』は主人公波斯要と妻の美佐子との夫婦愛のない結婚を巡って描かれる小説である。そこには、春に家の飾り物としての「八重山吹」を

見、離縁前の妻を思う要の気持が描かれている。

要は寝ころびながら今更のやうにそれらの柱の光澤を見、八重山吹の花が垂れてゐる床の間の春日卓を見、闕の向うに、戸外のみかきを水のやうに映してゐる縁側の板を見た。妻が此のごろのあわたゞしさの中にありながらなほとき／＼四季の風情を座敷に添へる心づかひを忘れないのは、いくらか情勢で繰り返してゐるのだとしても、やがて此の部屋にあの花までがなくなつてしまふ日を想ふと、名ばかりの夫婦と云ふものにも、朝夕眼に沁みる柱の色と同じやうななつかしきがある。

『蓼喰ふ虫』(その十三)

このように、要が「八重山吹」を眺めて離縁前の妻への懐かしさを想像する場面は、『新々訳源氏物語』で源氏が庭の「山吹」を見ながら亡くなつた妻紫の上を懐かしく悲しんでいる場面を踏まえている。

以上のことを踏まえると、谷崎が愛した故人の懐かしさとしての「山吹」を『少将滋幹の母』に持ち込んだ可能性が考えられる。そうだとすれば、「山吹」に夢中になる北の方の行為は愛した故人の懐かしさを捨て切れない感情の発露として理解できるだろう。

それでは、最終部で、「山吹」を「拂ひ除け」て母の顔を見ようとする滋幹が、母の特有な「香の匂」に浸つて泣いたことはどのように捉えればよいか。

まず、母の顔を見ることが彼女の「香の匂」を(その人)で滋幹がどのように感受しているかを確認したい。次の引用では、幼い頃に滋幹の母の顔を見た瞬間の感銘と、母の特有の「甘い匂いのする香」で滋幹の心が癒される様子がかがえる。

・母の容貌を心から美しいと思つたのは、その一瞬のことであつたが、それはちやうどその時に、春の日ざしの照り返しが、まともに母の顔の上にとゞよつてゐて、いつも奥深い暗いところではばかりみてゐた輪郭が、くつきり浮き出してゐたせみであつた。母は子供に気付かれたと思ふと、慌てゝ顔を子供の顔にびつたりと擦りつけたので、却つて何も見えなくなつてしまつたが、その代り睫毛にたまつてゐた涙の玉が子供の頬に冷たく触れた。滋幹は、後にも先にも母の顔をまざ／＼と見たのはその一瞬間だけであつたが、而もその時の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼きつけられて、生涯消えずにゐたのであつた。

・たゞ母の衣には、何と云ふものか特別に甘い匂いのする香が薫きしめてあつたので、じつと無言で抱きしめられてゐる間が好い気持であつた。そして家に帰つてからも、なほ二三日はその移り香や掌や袂などに沁み着いてゐたので、母が自分の身に付き添うてゐるやうに思へた。

このように、最終部では、北の方の感情の発露としての

「山吹」と、彼女の特有の「香の匂」が同時に登場することに着目したい。

彼は夢中で母の手にある山吹の枝を拂ひ除けながら、もつと／＼自分の顔を母の顔に近寄つた。そして、その墨染の袖に染みてゐる香の匂に、遠い昔の移り香を再び想ひ起しながら、まるで甘えてゐるやうに、母の袂で涙をあまた／＼び押し拭つた。

（その十一）

右の最終部の場面には、「筆者」により和歌的な表現が取り込まれていると考えられる。例えば、『古今和歌集』122番には、「春雨にほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花」とある。和歌の中で春雨に濡れている「山吹」の鮮やかな色と懐かしい香りは視覚と嗅覚によつて巧みに表現されているように、「筆者」が最終部に見える「もつと／＼自分の顔を母の顔に近寄つた」＝視覚と、母の「墨染の袖に染みてゐる香の匂」＝嗅覚によつて、四十年後、滋幹の母の顔を見ることができた感銘に、熟知する母の「香の匂」を嗅いだ感銘を加え、二重の感銘を描き出して見せる。その一方、「山吹」が北の方の愛する故人の懐かしさや捨て切れない感情をあらわすものだとすれば、滋幹の「夢中で母の手にある山吹の枝を拂ひ除け」る行為によつて、そのような北の方の女のセクシュアリティが取り除かれ、そこには母と子しかない空間が保たれる。つまり、末尾の「山吹」と「香の匂」は母と再会する感動と懐かしさをより一層引き立たせる

機能を果たし、（母恋い）のクライマックスを醸し出すものと考えられる。

おわりに

『少将滋幹の母』における「筆者」は、滋幹の心理を語る際、自らの見解を述べる形で、読み手である「読者」に、美化された母への息子の思慕の念をあらわしたり、姦通する既婚女性の母性と性愛を両立できない葛藤をも提示したりしようとする。そしてここでは、「筆者」が子供より自分の感情を選んだ母に対して、むしろ客観的な立場を取つていた。

「筆者」は母としての役割よりも、性愛を優先する女としての北の方の生き方を浮き彫りにする。この点で姦通罪の撤廃後間もなく発表された本作が、母であると同時に、性愛を求める女でもあることを「読者」に意識させるといふ点は意味深いと考えられる。

また、古典作品における「山吹」の用いられ方が、『少将滋幹の母』に取り込まれたことは、北の方の（情）を表現する。その一方で、「香の匂」は（母恋い）のクライマックスを醸し出し、本作の（母恋い）の主題を深化させた点において大きな効果を持つものであったことが明かとなった。

本作は、語りの多様性と、古典作品の運用の熟達をうかがわせる。そのみならず、姦通罪が廃止された昭和二十年代の当時における固有の母性イデオロギーの価値転換も（母恋

い)の語りには秘められていると言えよう。

注

- (1) 「適古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記」は『少将滋幹の母序文』で「此の作は、大体平安朝の古典に取材したもので、作者は一々それらの種本の名を揚げ、屢々原典の一部を引用して基づくところを明かにしてある。(中略)。中にたゞ一つ、作者が勝手に創作した「種本」、——つまり架空の書物の名が出て来る箇所があつて、それに関連した部分だけは作者の空想の産物である」と、作者の自説によつて虚構のものであることが分かる。
- (2) 野口武彦『谷崎潤一郎論』——第七章 母性思慕の主題」(中央公論社、一九七八年八月十五月初版)
- (3) 平野芳信「少将滋幹の母」論(『日本文芸研究』第33巻3、一九八一年九月)
- (4) 原善「逆不浄観の夢——谷崎潤一郎「少将滋幹の母」論——」(『作新学院女子短期大学紀要』第十九巻、一九九五年十二月)
- (5) 永栄啓伸「少将滋幹の母」論——奪取事件と母子再会を中心に——(『皇學館論叢』第29巻第1号、一九九六年二月十日)
- (6) 明里千章「永遠女性」の完成(『谷崎潤一郎自己劇化の文学』和泉書院、二〇〇一年六月)
- (7) 石割透「少将滋幹の母」(『解釈と鑑賞』57巻2、一九九

二年二月)

(8) 注6に同じ。

- (9) 「永遠女性」という言葉を最初に文学作品の中で用いたのは、ゲーテの代表作とされる長編の戯曲『ファウスト』第二部(一八三三年)の末尾であると従来の先行研究によつて指摘されている。周知の通り、谷崎作品にはじめて登場するのは、『夢喰ふ虫』(『大阪毎日新聞』、昭和三(一九二八年)年十二月)昭和四(一九二九)年六月)である。それは主人公・波斯要の心中を表現する「此の人の小春こそ日本人の伝統の中にある「永遠女性」という言葉に見える。明里千章氏はこの言葉を借りて、「北の方を介して父子が一体化したことを表している。すでに手の届かないひとりの女に対して、現実を超えた美の理想としての「妻」像と「母」像が二人の男の中で生成され、「筆者」は読者の前に「妻」と「母」とが一体化したひとつの崇拜すべき理想的な女性像を描出せしめたのである。所謂谷崎文学における「永遠女性」である(明里千章「永遠女性」の完成(『谷崎潤一郎自己劇化の文学』、和泉書院、二〇〇一年六月))と述べている。
- (10) 例えば、佐伯章「語りの秘儀」(『盲目物語』谷崎潤一郎著、中公文庫、一九九三年五月十日)氏が『吉野葛』(『中央公論』、一九三二年一(三月)から『盲目物語』(『中央公論』、一九三二年九月)、『武州公秘話』(『新青年』、一九三二年十月)一九三二年十一月)、『蘆刈』(『改造』、一九三二年十一月)十二

月)、『春琴抄』(『中央公論』一九三三年六月)について、「変化自在」、「多様・多彩」といった評価を与えており、また、大木絢子「少将滋幹の母」その手法と構造(『群女国文』第7巻、一九七八年七月)氏が「語り手」としての作者が、資料を繕きながらそれを紹介してゆくという手法は、谷崎にとつて既に『春琴抄』(『中央公論』昭和八年六月)で成功しているところであり、いわば手のうちのものである」と指摘している。

(11) 浅上泰子「谷崎潤一郎『少将滋幹の母』——語りを中心——」(『宇部国文研究』一九八四年三月)

(12) 大木絢子「少将滋幹の母」その手法と構造(『群女国文』第7巻、一九七八年七月)

(13) 母性という語の辞書的な意味は、「女性が母親として持つ性質」、「子どもを守り育てようとする母親の本能的な性質」(『日本国語大辞典』第二版(小学館、二〇〇一年五月)である。しかし、谷崎の(母性思慕)の作品群は、(実母思慕)と(継母思慕)とに枝別れする。例えば、『母を恋ふる記』(『東京毎日新聞』大正八(一九一九)年一月〜同年二月)、『不幸な母の話』(『中央公論』大正十(一九二二)年三月)や、また『吉野葛』(『中央公論』昭和六(一九三二)年一月〜二月)と『少将滋幹の母』(大阪・東京『毎日新聞』昭和二十四(一九四九)年十一月一六日〜翌(一九五〇)年二月九日)は(実母思慕)に属し、『夢の浮橋』(『中央公論』昭和三十四(一九五九)年十月)は(継母思慕)に属する。

(14) 注6に同じ。

(15) 拙稿「谷崎潤一郎『少将滋幹の母』論——「筆者」による不義」の擁護を巡って——(『日本研究論集』第四号、二〇一一年一月、大阪大学・チューラロンコン大学)

(16) 日本大百科全書6(小学館、一九八五年十一月一日)では、「戦後、妻とその相手の姦通だけを処罰し、夫の姦通を処罰しないのは憲法第一四条の平等原則に違反するという考えが支配的となった。そこで双方とも処罰するか双方とも処罰しないかが争われたが、一九四七(昭和二二)年罪の規定は削除されることとなった」と記載されている。

(17) 『主婦之友』昭和二十二年七月号(カラー復刻『主婦之友』昭和期目次Ⅲ昭和二十一年〜昭和三十年、二〇一〇年二月十四日(財)石川文化事業財団・お茶の水図書館編)

(18) 風呂本薫「谷崎潤一郎『少将滋幹の母』論——新聞連載における小説形式——」(『同志社国文学』第28巻、一九八六年十二月)

(19) 『谷崎潤一郎イメージ考』(『国文学』第43巻6号、通巻627、一九九八年五月十日)における谷崎潤一郎イメージ考(細川光洋「月」による)。

(20) 『谷崎潤一郎必携』・編者・千葉俊二、二〇〇二年四月二十日 宮内淳子「谷崎潤一郎キーワード—事典・桜」による。桜の花の下に佇んでいる滋幹の母北の方の姿を「樹下美人図」と評するのは、小林正明論(注22)も同様である。

(21) 注19に同じ。細川光洋「桜」による。

(22) 小林正明『大和物語』——谷崎筆先と遁走にそって』(『国文学解釈と鑑賞』第59巻3号、一九九四年三月)

(23) 『大和物語』(『新編日本古典文学全集』12、小学館、一九九四年十二月二十日、第一版第一刷発行)における高橋正治の注釈によると、「散つてしまつと残念でございませうのに、大井川の岸の山吹は、今日がさかりでございませう。早くおいでになつてください」の意である。

(24) 『大和物語』(『新編日本古典文学全集』12、小学館、一九九四年十二月二十日、第一版第一刷発行)では、「昔、私の所へおいでになつていたころ着なれていらつしやるのを見なれていた摺衣とおなじ摺衣の袖を、ああすばらしいと、いまはよそのお人のもつとしてみるこつがつらく思われたことですよ」と現代語訳されている。

(25) 『大和物語』(『新編日本古典文学全集』12、小学館、一九九四年十二月二十日、第一版第一刷発行)では、「あなたといつしよにいた昔の家が恋しく思われます。私も、ひとりですつらい気持で、過ごしております」と現代語訳されている。また、「山吹の花は自分のことをたとえる。山吹の花と井手の里はひとつになつてこそ体をなすのであり、離れているのは具合が悪いという言い方」だと補釈されている。

(26) 谷崎は生涯に三回(いずれも中央公論社刊)『源氏物語』の現代語訳を行っている。第一回目は昭和十四(一九三九)年一月から昭和十六(一九四一)年七月にかけて刊行された。第二回目は、昭和二十六(一九五一)年五月から昭和二十九(一九五四)年十月にかけて刊行された。第三回目は昭和三十九(一九六四)年十一月から『新々源氏物語』が刊行された。第三回目は完成度が高いため参照となる。

(付記) 谷崎作品の引用は『谷崎潤一郎全集』(中央公論社、一九八二年)に拠る。『古今和歌集』122番の和歌は『新編日本古典文学全集』、小学館)による。『大和物語』の引用は新編日本古典文学全集12、(小学館一九九四年一月二〇日第一版第一刷発行)による。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、また／は改行を示し、ルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。

(追記) 本稿は『異文化コミュニケーションのための日本語教育(予稿集、高等教育出版社・北京、二〇一一年五月)に掲載された「母恋い」の様相」——谷崎潤一郎「少将滋幹の母」を中心として」により、改題し、大幅に加筆修正したものである。

(チヨウ・レイセイ/本学大学院博士後期課程)